



岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉 第二卷

浮世草子 I

監修・編集

財團  
法人 東洋文庫  
日本古典文学学会

## 刊行のことば

近年における古典文学研究の発展は、はなはだ目覚ましく、書誌学的研究、文化史的研究等、内容は多彩を極め、深味を加えています。しかしながら、研究に必須の原典は、善本の多くが特定の法人または個人の所有に帰しており、一般研究者が常に精査する機会を持つことは、極めて困難なのが現状です。この状に鑑み、本会は貴重な資料を複製・影印により多くの研究者に提供することの必要を痛感し、この趣旨に沿つて貴重本資料の順次刊行を企画いたしました。本叢刊はその第一回に当たります。本会は、この事業の達成により、古典文学研究に裨益することを重大な使命と考えております。

東洋文庫所蔵本和書部の骨子ともいべき「岩崎文庫」は、数多くの善本を有する古典の宝庫として著名ですが、今回は特に、近年研究分野が拓けつつある近世文学の作品を対象に選びました。近世文学の影印本は、近頃盛んに出版を見ますが、本文庫の豊富な資料の刊行は、研究者になお一層益することと信じます。

本叢刊の特色は、資料的価値を重視し、従来の影印方式を一步前進させて、彩色部分を原色で再現した点にあります。丹緑本の挿絵、自筆稿本における朱注・補筆、殊に『青本絵外題集』に収められた二千点にのぼる絵外題の原寸・原色による影印は、多年にわたる識者の熱望に応えるものです。

本叢刊が多くの方々の愛用するところとなり、学術・文化の発展にいささかでも寄与できることを念願してやみません。

日本古典文学会  
貴重本刊行会

## 凡例

一、本巻には、東洋文庫蔵岩崎文庫本より井原西鶴没後の刊行作品五点と、都錦作『元禄大平記』を収録した。

一、原本は各作品ごとに一定の比率で縮小し、見開き（二面）を一頁に収めた。

一、題簽（版刷のもの）がある場合は、表紙と併せ収録した。

一、原本の汚れや落書きについては、修正可能な場合に限り手を加えた。

一、なお読者の便宜を考慮し、各作品の冒頭に作品名、柱の部分に作品名・巻数・本文丁数・通し頁数を掲げた。

1・巻数の表記は、「卷一」「卷二」……のかたちに統一した。

2・丁数は、本文の開始する丁を第一丁として、表裏の別を（1ウ）（2オ）の形式で示した。

一、本巻は堤精一が担当した。

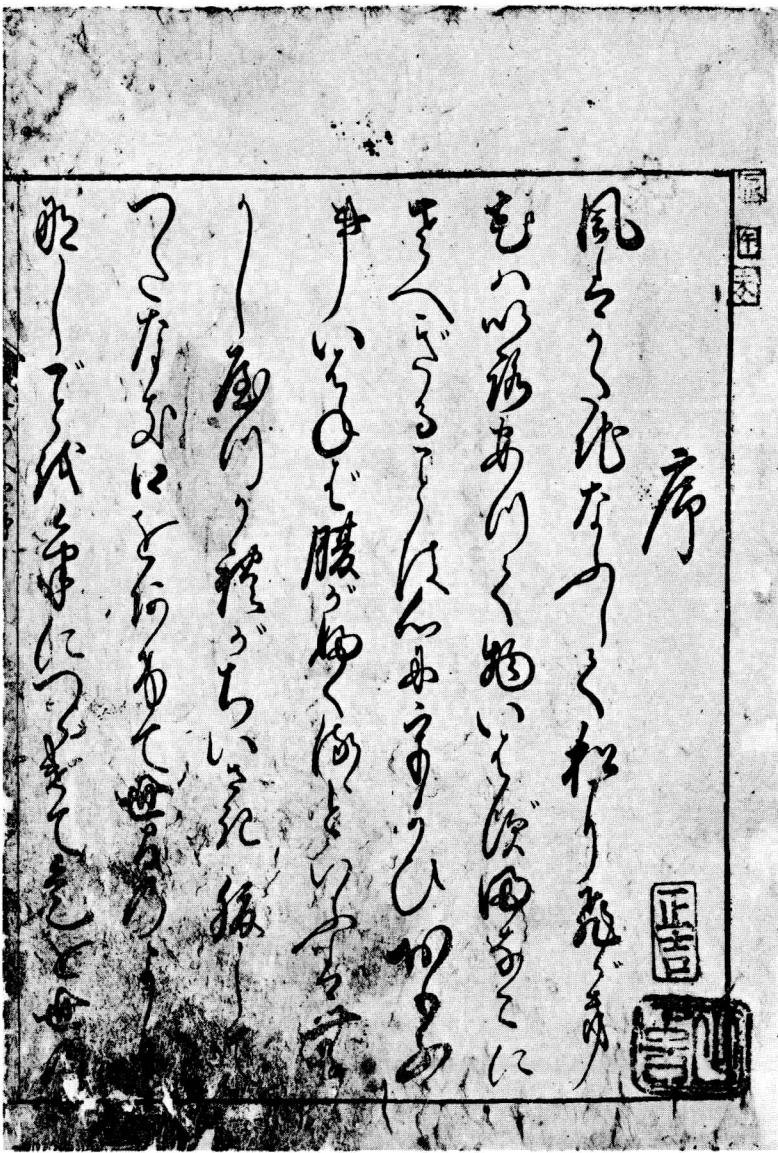
## 目 次

刊行のことば	一
凡例	二
西鶴織留	五
西鶴俗徒然	一一九
西鶴文反古	一〇一
西鶴名残の友	一九七
西鶴彼岸桜	三六一
元禄大平記	四二九
解説	五七一
堤精一	一

編集委員

渡辺 森 堤 鈴 久保  
森 岡 木 田  
兼 康 精 重 淳

# 西鶴織留



人をもつて難波がえりをも減る。

物あ

難波

西鶴



元禄其月吉日



而爲生瀬のうち。遂作もと木ノ假毛革子。  
據よ先牛小汗もくせふとひあくや。且、を代  
毛す朝町人避せの人心。あもと二切の事とあう  
む商賈入へ開きもとより日用せとづるをほり  
あらわを得へる。急邊さくへだもの不  
意ハ其功なりて。町人避せの人心。事  
色ト西鶴が口にけせとまゆ。れい海原  
のくよへじかく三都の胸をよみ

二

ふむとくの種の松草  
種のうりを産す  
便もつりくひとす

一

津の國のかし里  
里の古賀國を國平がく  
よき古賀の大御神

同解一

西鶴藏西本の月人鑑

かをもかちどがつて巻て後去のまむか  
珠と御源とかくとにかくかんと書林集  
の歌うよすゑあがの書かわす。すれ  
とそり合せく一絆とが。されよあくづい  
てや又序ともせ書の功ありそにつけ  
一と題へて歌を書きて筆成深得る  
元禄七年

成印月上旬 雄波鶴林

同水詠



三 右帳よりは十八人に。

埋もれずの清きるを爲  
桃源に猶豫りあらず

四 所も山の物語女文

數百人もしくひよ者松  
聲によるわざと富士山

一 ほの國のうへ里

神戸のところ人歌す哉とおの眠り中はもあれ御事校  
美すばせ。近平町人より傳ゆく食事より厚く。又は紫雲山の  
なり。後年代銀年く御後つてを是れどもアホ葉花締  
紙や。御身持度の乞食より始ゆ。乞と仰ゆに至りて  
豪業に拂ひ。もろ事なりと衰て津の國伊丹船を経て  
舟あぐく。毎年九月三日を當日遊すら。せすう船を  
つまて。小男の仕合と方舟がおもむらにすむ。今  
て御と御願い。御よかそ親の右腕と左腕。おまけに  
衣張。もと御う毛うけぬふらもあら。我より。おまけに  
としどとおの馬車通ひのまことす。お金持がよくな  
て。おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

異用にまじ徳とひれ興のむすめとむじ國事  
 ほくはまめ事寝間併ど二つのみの頬そくとよみだ  
 て吉良とゆのゆうぬあら行ひゆくとゆくとゆく  
 ゆゆまうゆと隠の床ゆかひひきめく何事くゆ  
 い声とせきゆや今振振の内地はれよ代りや顔  
 関東翁の風ゆきて八本城わざとなれよ是もうおほとがりて  
 道國木不ぞ笑ひあり活ゆへまこと根よりてあお風衣木  
 もう事とよしむるはるとあを雲がねとまこと今  
 まこと根を猪と麻とゆきひづけ叶はて伝舟の人は事  
 とよ車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車  
 もう車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車

して危険せんぐるにまち高や低揚琴のうじゆく  
 技筋とのびるをゆめ那波はく夜の移みよひまに  
 かく門限て扇うちまくまくもく懐さへ茶雀の細なう  
 こし連てゆく秋今多くまくゆく縦無尺と魚よ鰯にわ  
 乃着まうせんが作すくらうよ神浦音酒越の跡う黒花の  
 お吸物切て鴨の板焼へたれよすくみを度度(ゆく)と勝よと  
 燃えほさま。草主の御船と侍御女房へ酒肴とむ氣味  
 いじわひゆく。あらかじめ賀松付を亮よ足次く候さむ。  
 韶りと身指とせり。奈落のだけゆとら著  
 て香り。じ葉むふるとあれ事とく。我声を京中半  
 ニのあはれ口十七車の豪傑までも豪傑よ櫻て起と山の流  
 と泉たまむとく。外と経路うたふ。意角洋と金源



夜の加茂へ向てとひかへる。承るが業事の  
にも居りあらず。只一時めうちニ三日八百石丁作めく  
わうの心び思ひへり。御業事又居業事同むと傳て。據盤  
く伊丹より。親たゞ小判の心を乞ひて筒金代うへた  
間もあきだき長持からり。門にゆきくわひあがり  
女と於て才色上事にて利とゆゑ不分明すか。さば  
お處を後へ。御酒傍詠田舎と求め。極もかゆきて。信山  
の元日のかほとして。又親と胸を並べて。菴  
茶と丸をよ経て。伊丹城ちぢにいはせうふ。母親。年  
大えども。親者成實印。併のへと焉まうろ年うう仁  
合り。と今にうち廻りたり。相親に。手取るあひ。まち  
て迷言語とあらめ。親今すて。精旨付。お経書れり。かま

としき。一ノ月の間。宿泊七昼夜。年暮に半瀬で。軍二  
の主より。八十三歳。と。宿泊。まつて。六十日。一門集り去  
れ。かと御ささら。に。貢。夏秋。か。富。毛。而。核。九。糞。肉。參。三  
而。に。入。重。そ。ば。緑。身。の。大。が。に。加。り。一。セ。西。御。其。他。の。業。入  
うち。の。金。限。あ。れ。か。被。す。身。瀬。して。か。ら。も。是。ひ。事。  
往。停。と。因。す。下。孫。よ。あ。か。へ。町。人。の。家。業。が。又。耕。を。  
か。の。ひ。さ。快。而。月。も。や。す。わ。瀬。主。の。一。生。を。食。て。ゆ。す  
世。の。時。乞。う。が。く。と。ど。營。村。も。營。業。事。に。ま。づ。と。要。あ。る。そ  
と。と。う。事。か。か。く。ア。レ。と。事。と。被。す。身。を。方。の。業。事。に。ま。づ。と。要。あ。る。そ  
ク。圓。と。甲。裝。か。か。く。と。度。の。業。事。を。う。づ。被。す。身。を。方。の。業。事。に。ま。づ。と。要。あ。る。そ  
ス。ア。レ。ア。あ。ま。だ。ム。シ。娘。あり。て。生。れ。の。業。事。を。身。業。事。を。  
娘。娘。二。而。業。事。を。身。か。よ。や。瀬。ア。レ。中。男。ア。ダ。養。親。の。業。事。

是よりの者なり。すこりと作者方事とへ跡ありの  
にあはれてもあらぬ四度の事とひし傳連移へ新庄  
池へ入船場の船の梅舟と里よじへ来たる船の坊と相生と  
船の主と坐船とゆきの美湯へ合志の一橋御櫻の唐木  
に通じる基所の二つをぞむけり。楊柳へ中門とみた金身の  
窟後十石壺へ山寄木とまき有鐵の道者とくしげか籠  
琴へ嵩山小寺の墨竹と金身。壁もと作りひづねましや  
中間のする事ゆてもねねにすせ。の風景角人等のび  
所の数を言ふともうせども御宿の事と御宿の事と御  
太氣の金つさ。南莊は四敷なく金屋をなすを算ておとづ  
庵あらわしておとづれ。金山支店の御事の角よひや。  
行がりあらてとぞと構へるのみ。院よ七歳のひぐめ

て小舟をぬ駕て、祇時の風と雲とや九度内とだらうとあ中ゑ  
乃中に一步水へてうげをゆ。すこもれ河へて、紙と扇もぬ  
す凡人膳のれんし。葱角高貴の事。御用物。往而  
來の旅のうち。御好外度を仰り。あくへ人小姓をり男女  
ともよりつとせん。人然ともかく一生挺ひ世事。けく脅脛を  
晦日にあ廢し。ぱとよ寄ハ原とそと御手を。御相果て食日  
御手と連絡進ひくとよ御手の事。ぱとよも。昔古  
うきをゆ。かくと親たもの年あれど。まの所まゝとまがゆ  
て御度。おじて御のと御おひへゆ。自らすが花がくせが  
がをくべ郭とくがくべ。あうゆけられ着ふ。晴れ。あら  
前あくよ秋寒煙ふわ御身。か一日もあらぬ花



け。あすに傍りなだ湯代の役とゆきをうする  
仰せ事御あるひとある處の金取り紙をいふ事ある  
傳達のあともじつに變りてはあらまへ慢くどう  
あく、傳拂と御ねばゆが事より聞かよ世間並うすま  
て泥拂ひれ事もなし。たゞ事の起り人をもさげたゆるて  
人を代役官員後へタ原よ傳教使から難せ事すを難  
と難よ生じゆゆ。端より事主取扱へ候日は法事すを  
済へるのを難い事身に其のあまうに湯船と  
乍ら御供従し。故佛徒種とせひ事よわざと傳拂と難む  
難つ事無し。先き泥拂と御事主手にまづり取てこの  
ひとよ。泥拂の自害相へどうぬる極りて。世ようとひ立  
ひ算か高意うすく泥拂賛へ平康うじておひた能

とあり無。アセたが兩毛足を無事。幸利子の方を食ひ合ひ  
ゆゑく世に加減あしづぬとひ家因あり。絶う。無理有り  
欲をせよばせず。此事ぞ。す。縁をもうかうにせつうら  
き處へと御ども御性おね商人のほづを莫れやう。でも。利潤  
にひきあげ皆人をよみがりぬ。と。泥拂のまことのう  
自由行を行つても見立は當れ。御約束多し。度粗  
乃根の南が更へ高まつて。御年は三百十日の風雅と。吹  
ちら吹と東方解。傳書と。と又合とひと。儀の業と。一景入  
とゆうゆうなりの地へ詣め。と。御仕事。お世を嘗まくと  
卒日は立年。度のう。一月の御御の山草ナラ。翠と  
竹ぐれや蓮。度のう。御御の花。萬葉今と。而く見ゆる。折  
緑あとも言よ胸と。頭で蓮の堅木食くまわもあら

